

若者の文化財保護に対する意識に関する研究 —大学生へのアンケート調査から—

森屋 雅幸 (現代教育研究所研究員)

1. はじめに

2017 (平成29) 年12月に文化審議会によって「文化財の確実な継承に向けたこれからの時代にふさわしい 保存と活用の在り方について」(第一次答申) が公表された。この第一次答申の中で長期的観点から検討すべき課題に「(前略) 次世代を担う子供たちへの教育的な取組の推進について」(文化審議会2017: 23) が謳われ、次世代の文化財保護の担い手の教育的な取組の必要性が示された。また、2019 (平成31) 年3月に文化庁によって公表された「文化財保護法に基づく文化財保存活用大綱・文化財保存活用地域計画・保存活用計画の策定等に関する指針」においても「普及啓発や人材育成については、文化財の担い手を広げていく観点から、地域住民や訪問者はもとより、次世代を担う子供たちが文化財の価値・魅力に触れることができるよう、地域学習の教材等としての文化財の活用など、学校教育・社会教育と連携した取組について位置付けることが有効である。」(文化庁2019: 7) と第一次答申と同様の内容が示された。現在、このように次世代の文化財保護の担い手を育む教育的な取組が求められる背景には、先述の第一次答申を確認すると「過疎化・少子高齢化の進行により地域の衰退が懸念されている。これは豊かな伝統や文化の消滅の危機でもあり、文化財は、未指定のものも含め、開発・災害等による消滅の危機のみならず、文化財継承の担い手の不在による散逸・消滅の危機にも瀕している。」(文化審議会2017: 1) とあり、日本国内で進行する過疎化・少子高齢化の影響から、文化財継承の担い手不足という問題が深刻化していることが考えられる。

以上のように、次世代の文化財保護の担い手の育成を教育的な取組として、今後検討していくことが文化財保護政策では課題といえる。こうした問題意識をもつ先行研究としては、子どもや若者が文化財保護に具体的にどのように関与してきたのか、その実態をおもに1960年代の文化財愛護少年団活動の事例研究から明らかにした研究や(森屋2019a)、山梨県都留市禾生第二小学校6年生の児童を対象に学区内に所在する旧尾県学校校舎(県指定文化財)に対する想いを測定するアンケート調査を実施した研究が確認できる(森屋2019b)。先行研究のうち前者は、歴史研究としての性格が強く、後者は児童のみが対象で青年層が文化財に対して抱く意識まで明らかにしたのではなく、また、学区内の単一の文化財に対する想いを明らかにしたのみで、文化財全般を対象とした研究ではない。なお、市民が文化財に対する意識を明らかにした研究は、馬場憲一が地域主権を実現するため、日本の自治体文化財政策を検討する過程でアンケート調査を実施している(馬場2013)。ただ、このアンケート調査においても20代の回答者は1名であり、調査は子ども・若者の文化財に対する意識の全容を明らかにするまでには至っていない。

以上の先行研究から、現代の子ども・若者が文化財に対して抱く意識を明らかにする研究は、ほとんど取り組まれていないのが現状といえる。また、児童を対象に単一の文化財に対する想いを明らかにする先行研究は確認できるが、青年期の若者を対象とし、文化財全般に対する意識を明らかにする

研究は確認できない。以上から、本稿は現代の若者の文化財に対する想いを明らかにすることを研究目的とする。こうした研究は、文化財保護の担い手の育成を目的とする教育的な取組を推進する手掛かりになると筆者は考える。

以上をふまえて本稿の構成を示す。第2節では、研究方法の検討を含めて、市民が文化財に対して抱く意識を先行研究から概観する。第3節では、大学生を対象に第2節で検討した研究方法を用いて、若者の文化財に対する想いを明らかにし、第4節で結果を考察する。第5節は結論と研究課題を示す。

2. 文化財に対する市民の意識について

まず、若者が文化財に対して抱く意識を明らかにする前に、そもそも市民が文化財に対してどのような意識を抱いているのか確認しておきたい。ここでは、先行研究で示した馬場憲一の研究を手掛かりに市民が文化財に対しどのような意識を抱いているのか概観する。馬場は、アンケート調査(n=140)の分析で9割近くの回答者が文化財を「歴史を語るもの」とイメージし、意識としては、「保護しなければならないもの」(回答者の約7割)、「文化の香りがするもの」(同約4割強)、そして市民の約3割強は「宝物」「近寄りがたいもの」「老人的趣味」という意識を抱いて、文化財に接していることを明らかにした(馬場2013:10)。また一方で、文化財を「親しみやすいもの」「身近なもの」ととらえる回答者は14.3%で少数であることも明らかにし、市民の文化財に対する考え方は、文化財が歴史的または文化的なもので、宝物であり、保護しなければならないものという考え方が強く、親しみやすく身近にあるものという意識は極めて薄いことを指摘した(同上)。そして、馬場は同調査の分析から市民の約8割近くが「国指定の文化財」⇒「都道府県指定の文化財」⇒「市区町村指定の文化財」⇒「指定されていない文化財(未指定文化財)」という順で文化財の価値の高さをとらえていることも明らかにした(同上)。馬場は以上をふまえて「市民の『文化財』に対する意識は極めて固定的、かつ狭小的なものであり、現状では『文化』という広い概念から『文化財』の中に身近な『地域遺産』という考え方を組み入れて、それらを含めて文化財として捉える市民の存在が少ないことがわかる」(同上:13)と分析する。

ところで、福岡猛志は、自身の経験に即しながら文化財を骨董的価値、貨幣的評価でとらえる発想が地域に根付いていることを指摘しているが(福岡2017)、このように福岡が指摘する地域に根付く発想と馬場がアンケート調査から分析した結果をすり合わせると市民がイメージする文化財とは、身近な日常生活と切り離され、骨董的価値を有するモノ、例えば博物館・美術館に収蔵される資料をイメージしている可能性が考察される。こうしたモノに内在する骨董的・貨幣的価値を加藤有次は絶対価値と呼称した(加藤1977:79)。加藤は絶対価値について、骨董的・美術的価値であると同時に歴史的・伝統的価値観からしても国宝・重要文化財とされるものが多く、経済価値や希少価値をともなう資料とする。一方、希少価値が無く同類のものが数多くみかけられる生活文化財は、調査研究によってその価値が初めて明らかにされる創造価値を内在すると解説する(同上)。つまり、市民は絶対価値を内在するモノを文化財として認識し、日常生活に身近で数多くある生活文化財は、文化財として認識されにくい可能性が推察される。

現在の文化財保護政策で子ども・若者に文化財保護の担い手として期待されているのは、絶対価値を有する国宝・重要文化財の保護というよりは、第一次答申の「過疎化・少子高齢化の進行により地域の衰退が懸念されている。」(文化審議会2017:1)という前置きに示されるように、むしろ

過疎化・少子高齢化が進行する地方の文化財であり、馬場が明らかにした市民の意識にある文化財の価値序列で低位に認識される文化財群の保護であると筆者は考える。このことを念頭に置くと、単に若者が文化財に対して抱く想いを明らかにするというのではなく、地方の未指定文化財を含む文化財に対して、若者がどのような想いを抱いているのかを明らかにする必要性があるといえる。また、日常生活で身近に接したであろう文化財についてどのような想いを抱いているのかを明らかにするためには、当事者にとって無縁の土地の文化財ではなく、自身の出身地の文化財に対する意識を明らかにする方が有意であると筆者は考える。同時に、若者の文化財に対する多様な意識を明らかにすることを考えると、様々な地方出身地の若者の存在が想定される大学生を対象とした調査が有意性をもつと考え、本稿では大学生を対象とする研究をとおして、若者が抱く文化財とその保護に対する意識を明らかにする。具体的な研究方法として、本稿では馬場（2013）、森屋（2019b）の先行研究を参考にアンケート調査を実施し、その結果を分析する。以下では、まずアンケート調査の概要と結果を示す。

3. アンケート調査の概要と結果

(1) 調査の概要

調査概要は表1にまとめた。質問紙は、大まかに大学生が出身地の未指定文化財を含む文化財に対して抱く意識と担い手として、出身地や出身地以外の地域の文化財保護に携わることに對する意識の測定を目的に質問項目を作成し、選択肢回答と自由回答を交え構成した¹。

調査は、山梨県都留市に所在する都留文科大学と静岡県浜松市に所在する静岡文化芸術大学で実施した。両大学は公立大学法人が運営し、中部地方に設置される点で共通点をもつ。在學生は大学設置地の出身者が多いことが想定されるが、「大学基本情報2019」²の学部学生内訳の出身高校の所在地県別入学者数を確認すると、都留文科大学は入学者866名の内、大学が所在する山梨県が124名で最も多く、次いで静岡県・長野県がそれぞれ61名で、他の620名は全国の都道府県からの入学者である。一方の静岡文化芸術大学は、入学者353名の内、大学が所在する静岡県が130名で最も多く、次いで愛知県が90名であり、他の133名は全国の都道府県からの入学者であることから、両大学の在學生は、必ずしも大学設置地の出身者で占められるわけではなく、全国の都道府県の出身者が一定数在學していることが想定される。調査対象者は、都留文科大学で開講する博物館資料論の受講生と静岡文化芸術大学で開講する文化財保護政策の受講生である。どちらも筆者が担当する講義であり、講義の最終日に集合調査で実施した。回答総数は、都留文科大学が31票、静岡文化芸術大学が14票であった。本稿では両大学における調査結果を統合して、分析に用いた。

表1 調査概要

調査箇所	都留文科大学（山梨県都留市）	静岡文化芸術大学（静岡県浜松市）
回答者	31名	14名
調査期間	2019年1月28日	2020年8月28日
調査方法	質問紙による集合調査	
回収状況	有効回答31名、有効回答率100%	有効回答14名、有効回答率100%

(2) 調査の結果

表2-1、2-2に回答者の属性を示した。性別は男性7名、女性38名で84%が女性である。年齢は19歳から22歳までで、21歳の回答者が34名で全体の76%を占める。この内、21歳の女性は62%で全回答者の半数以上を占める。なお、回答者の平均年齢は20.5歳である。

表2-1 回答者の属性

性別	年齢				合計
	19歳	20歳	21歳	22歳	
男性	0名	1名	6名	0名	7名
女性	6名	3名	28名	1名	38名
合計	6名	4名	34名	1名	45名

表2-2で回答者の出身地を確認すると、大学設置地である山梨県と静岡県がそれぞれ全体の13%を占め、隣接する愛知県や長野県の出身者が次いで多く占める。中部地方の出身者が岐阜県を含めると53%と約半数を占めるが、残る回答者は東北地方から九州地方に至る都県の出身者が確認できる。以下では、回答を単純集計した結果について、設問ごとに記述統計から大学生が文化財に対して抱く意識の傾向を明らかにする。

表2-2 回答者の出身地

出身地	人数	割合	出身地	人数	割合	出身地	人数	割合	出身地	人数	割合	
青森県	1名	2%	栃木県	2名	4%	長野県	4名	9%	山口県	1名	2%	
宮城県	1名	2%	東京都	2名	4%	岐阜県	1名	2%	徳島県	1名	2%	
山形県	1名	2%	神奈川県	1名	2%	静岡県	6名	13%	香川県	2名	4%	
福島県	1名	2%	富山県	2名	4%	愛知県	5名	11%	愛媛県	2名	4%	
茨城県	3名	7%	山梨県	6名	13%	滋賀県	1名	2%	長崎県	2名	4%	
合 計											45名	100%

問2、問3の回答を属性とともに図1と表3にまとめた。問2(図1)は出身地で大切に思ったり、自慢したりできる文化財の有無を問うもので、「ある」と回答した回答者は39名で全体の87%を占める。「ない」(No.16、37、41)、「わからない」(No.13、19、24)の回答者がそれぞれ3名であり、13%を占める。このことから、ほとんどの回答者が出身地に何かしら自慢できたり大切に思ったりする文化財があると認識していることがわかる。また、「ある」と回答した回答者に対し、問3(表3)で具体的な文化財の名称の自由回答を求めた。この回答では無回答は無く、有形・無形また指定・未指定を問わず様々な回答者の出身地の文化財が挙げられている。

次に問4、5では、出身地で大切に思ったり自慢できる文化財が「ある」と選択した回答者39名に対し、文化財の保護や継承に何らかの形で関わりたいと考えるか、択一式の設問と選択理由を自由回答で求めた。結果は図2と表4にまとめた。問4(図2)で出身地の文化財の保護や継承に何らかの形で関わりたいと「思う」と選択した回答者は39名中22名で全体の56%を占める。「思わない」は2名(No.10、39)で5%を占め、「わからない」は15名(No.2、7、8、11、22、27、31、32、33、34、38、40、42、43、45)で39%を占める。なお、「思う」を選択した回答者の内、No.1、4、9、11、18、25、26の7名(32%)は問5(表4)で文化財を後世に伝え、残す必要性を理由として回答する。また、「わからない」と回答した回答者のうち、No.8、11、34、45の4名は出身地に帰るかわからないことを回答の理由とし、No.27、33の2名は現時点で出身地に帰る気が無いと回答している。そして、「思わない」を選択した2名の回答者のうちNo.10は文化財保護に対して主体性を感じたことがないことを理由に述べ、No.39は文化財の名称を挙げたものの、内容を知らないことを理由にしている。

表3 回答者の属性と出身地で大切に思ったり自慢できる文化財（問3）

No	性別	年齢	出身地		問3の回答
1	女性	21	長崎県	川棚町	魚雷発射訓練場、火薬庫、海の砲台
2	女性	21	愛媛県	愛南町	相撲練り、五ッ鹿、荒獅子、牛鬼
3	女性	21	東京都	八王子市	高尾山薬王院（本社、お堂）、たご杉、八王子祭り（みこし）、浅川濠、八王子城跡
4	女性	21	長野県	諏訪市	諏訪大社、片倉館、五本スギ、高島城
5	男性	21	宮城県	栗原市	ゲンジボタルの生息地、伊豆沼
6	女性	21	神奈川県	相模原市	ふじや（吉野宿）、おはやし、神社（日連神社）あと、舞台がある神社
7	女性	21	静岡県	伊東市	大楠（樹木）、天狗のわび状、東海館
8	男性	21	徳島県	石井町	田中家住宅
9	男性	21	山形県	天童市	織田信長肖像画、ししおどり
10	女性	21	山梨県	甲府市	信玄公祭り
11	女性	21	富山県	高岡市	高岡銅器・漆器、高岡大仏、瑞龍寺、御車山祭り、金屋町の古い町並み
12	女性	21	山梨県	甲府市	月輪延命地藏尊、楠木地藏
13	女性	21	山梨県	大月市	—
14	男性	20	静岡県	静岡市	日本平の久能山東照宮、清水港祭り、富士山、登呂遺跡、駿河竹筋細工
15	女性	21	静岡県	静岡市	登呂遺跡、久能山東照宮
16	女性	21	富山県	入善町	—
17	女性	21	愛媛県	松山市	松山城、道後温泉
18	女性	21	茨城県	日立市	日立鉱山の大煙突
19	女性	21	長野県	池田町	—
20	女性	21	栃木県	足利市	足利学校、鏝阿寺、八木節
21	女性	21	茨城県	つくば市	鹿島神宮、笠間焼きなど
22	女性	21	山梨県	甲斐市	武田神社、積翠寺、舞鶴城（甲府城）、藤村記念館
23	女性	21	静岡県	浜松市	浜名総社神明宮
24	女性	21	愛知県	豊明市	—
25	女性	21	長野県	佐久市	旧中込学校
26	男性	21	山口県	岩国市	岩国の白蛇、錦帯橋、行波の神舞
27	男性	21	愛知県	豊橋市	鬼祭り
28	女性	21	香川県	高松市	金比羅宮、丸亀城
29	女性	21	茨城県	桜川市	古い町並み、真壁祇園祭
30	女性	21	山梨県	都留市	牛石遺跡
31	女性	21	山梨県	山梨市	唐土神社、根津嘉一郎の邸宅
32	男性	21	岐阜県	瑞穂市	やな（夏季限定で営業する川沿いの鮎料（理）屋、またはそこでの食文化）
33	女性	21	香川県	高松市	香川漆器
34	女性	21	長野県	長野市	善光寺、びんずる祭り、戸隠神社
35	女性	22	愛知県	豊橋市 (豊川市)	豊橋：鬼祭り、二川本陣、吉田城、筆、能面、公開堂、手筒花火、韋毛湿原 豊川：豊川海軍工廠跡、豊川稲荷
36	女性	19	青森県	青森市	ねふた祭り、三内丸山遺跡、白神山など
37	女性	19	東京都	新宿区	—
38	女性	21	静岡県	菊川市	応声教院、赤レンガ倉庫
39	女性	19	静岡県	藤枝市	志太郡衙
40	女性	19	愛知県	名古屋市	有松
41	女性	19	愛知県	あま市	—
42	女性	20	福島県	玉川村	昔の農機具
43	女性	20	長崎県	長崎市	原爆関係の遺跡・資料館、江戸時代から明治の産業遺産（出島、端島（軍艦島）、精霊流し）
44	女性	19	滋賀県	長浜市	長浜曳山祭り、長浜城
45	女性	20	栃木県	佐野市	田中正造の遺品、エラスムス立像

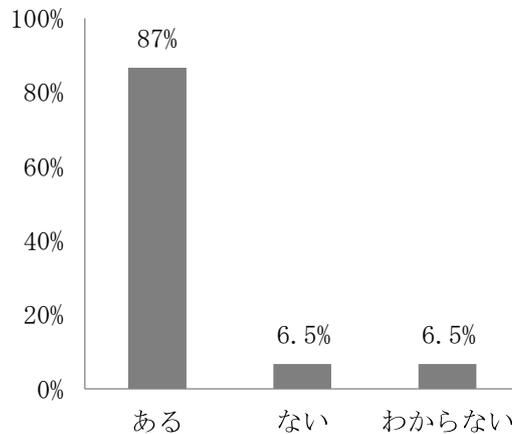


図1 出身地で大切に思ったり自慢できる文化財の有無（問2）

若者の文化財保護に対する意識に関する研究

表4 問4の回答理由について(問5)

No	問5の回答
1	伝えていくという重要なことに貢献したいから。
2	無回答
3	現在は、文化財に焦点を当てた政策が目立って行われているわけではないが、いつかそうした政策がなされるときは、自分の思う様な活用のされ方が行われるとは思えないので。少しでも関わっている状態で、意見を発信をできるようにしたい。
4	主体的に何か活動を始めようとは思わないが、ボランティア募集や仕事で携わる機会があれば、後世に文化財を残したいという気持ちもあるから、関わっていききたい。
5	現在、ゼミの個人研究で、伝統的農法、それに伴う文化・慣習について調べている。対象は栗原市ではないが、県内では伝統を活用・保存しつつ未来への持続可能性につなげている事例があるため、それを参考に栗原市でも活性化がなされ、そこに貢献できたらと思っている。
6	昔の記憶を知る作業はおもしろいなと思うから。
7	無回答
8	地元に戻るかどうかかわからないから。
9	残していかなければならないものであるため。
10	自分はあくまでもそれを楽しむ側という認識で、何らかの形で関わるということは考えていなかったから。
11	関わって、文化財を保護して後世に伝えていきたいが、地元に戻るかもわからず、どのように関われるのかわからないから。
12	無回答
14	失われて良いものではないため。
15	教師を目指しているため、将来学習の一環で利用したいと考えたから。
17	非力だと思いますが、少しでも地元の文化財の力になれるならできるとをしたいと思います。
18	私は今日立鮎山の煙害問題について論文をかいていて、日立市が栄えたシンボルであり平成のはじめに3分の1まで倒壊してしまった煙突であるので、地域の人々と立鮎山の努力の結晶である大煙突を守り、伝えていきたい。地域の立鮎山関係のもよおしにボランティアとして参加したい。
20	文化財が現代まで残っていることを誇りに思うから。
21	無回答
22	無回答
23	自らが育った地域を守っていくため地元を知っていく上で必要と考える。
25	地域の文化を次の世代へと伝えていきたいから。
26	白蛇に関しては地域にかつてあった白蛇信仰や伝承を白蛇そのものといっしょに保存できる幸運な状況にあるので、後世に伝えていきたい。釘を1本も使わない木組みの橋である錦帯橋はその内部にある建築技術や、「岩国よいとこ」などに歌われる街のシンボルとしての姿を保存したい。
27	歴史や文化が好きで文化財に関わりた気持ちはあるが、卒業後に出身地に住む気がないから。
28	今年初めて初詣で金比羅宮を訪ねましたが、まるで京都の清水寺へ行く坂のような道があり、とても驚き感動しました。1年中こうだったら良いのにとそのとき思ったからです。
29	問3で挙げた古い町並みは真壁城の城下町として栄えた当時の建物が多く残されているものですが、2011年の東日本大震災で大きなダメージを受けました。今まではほとんどの建物が修復されましたが、まだビニールシートがかけられている建物も少なくありません。それを見る度、「何か自分にできることはないか?」と思っているので、関わる機会があればぜひ関わりたいです。
30	地域に愛着がもてると思うから。
31	無回答
32	地元に住んでいないし、地元でも生活圏内の文化財ではないため外部からの来訪者の印象が強いため。
33	高校の頃、香川漆器の知名度が低いことを問題視し、グッズ製作や販売などを行いました。多くの人に購入していただき漆器を広める機会となりましたが、将来地元に戻る予定が今の所ないため、関わりたい気持ちはありますが実際できるかはわかりません。
34	保護・継承していきたいとは思いつつ、地元でこの先帰るのか、帰ったとして、どうしたらよいかかわからない。
35	地域のアイデンティティ形成のために必要であり、その地の歴史について学べる重要な史料だと思うので、守っていくべきだと思うから。
36	無回答
38	興味はあるが、どこまで熱意をもって続けられるかわからないため。
39	どういものかさえ知らないから。
40	無回答
42	関わってみたいとは思いますが、文化において大きな責任を負うイメージが強く、踏み出しにくい。
43	今まで文化財の保護等と自分の将来を結び付けて考えたことがなかったが、今回この講義を受けて興味が湧いた。具体的には何も考えていないが、調べてから何かしらの形で関わることも考えたい。
44	曳山祭りに昔参加していたから。また担い手が少なくなっているから。
45	出身地に戻るかわからないため。

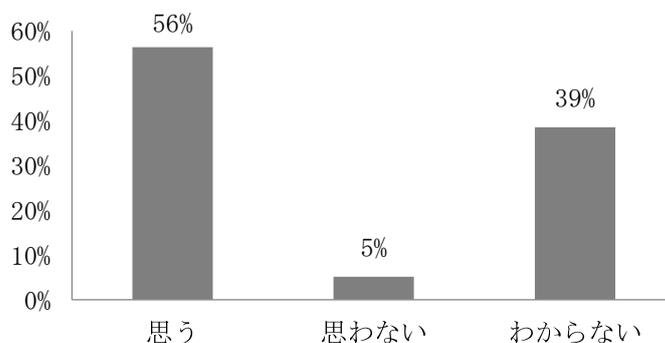


図2 出身地の文化財の保護や継承に何らかの形で関わりたいと思うか(問4)

表5 問6の回答理由について(問7)

No	問7の回答
1	文化財がどのようなものであるのか知らなければ、そのものもつ歴史も消えていってしまうと考えているから。地域の歴史は、地域が率先して守るべきと考えるから。
2	文化財を大切にすることは、それそのものの価値だけでなく、文化財にまつわる地域の文化や記憶をつたえていくことであり、地域「らしさ」によって人々を形づくるものだと思うから。
3	その土地の歴史や土地柄を表すものだと思うので。似た様な物があっても、同じ物はないと思いますし、それを大切に出来るのはその地域だけだと思うので。
4	無回答
5	文化・慣習が次第になくなっていくのが寂しいと実感することがある。また、古くの生きる知恵や教訓は未来でも必要になると思う。
6	それがないと「らしさ」がなくなるから。
7	ずっと前の世代から受け継いできた貴重な資料をこの世代で途切れさせると、将来世代に地元の文化、伝統が残らなくなってしまうから。
8	過去から現代まで守られてきた文化財だから。それを残すことで地域のよりどころになるから。
9	残していくことで新たに知ることができることもある。
10	昔から大切にされてきたものであったし、「伝えていくことが大切なもの」という認識があるから。
11	伝統文化を知ることは自分の故郷を深く知ることでもあると考えるから。今日まで受け継がれてきたのだから、次の世代につなげるのは当然の役目だと思うから。
12	今ある日本の文化がどういう意味を持っているのか知ることができる手がかりになると思うから。
13	文化財は地域の歴史に深く関わっている。いわば地域の遺産だと考えているので次世代に伝えていくべきだと思う。
14	問5と同じように、自分の世代で廃れさせてしまっているものではないと考えるため。
15	地域を知ることは発展にもつながると考えたから。
16	地域愛が生まれる。興味・関心の幅が広がる。歴史の勉強になる。面白い。
17	文化財を教科書や本などで学ぶだけでなく、実際に行って体感することが大切だと思うからです。
18	文化財は地域にとって、歩んできた歴史であり、地域のよりどころであるのでその思いを次世代に伝える重要な役割があると思う。
19	自分が子供の頃に見ていた光景・風景が完全に失われてしまうことが虚しく思えるから。郷愁。
20	文化財が現代まで残っていることを誇りに思うから。
21	県民の誇りとして、日本の大切な文化の1つとして、それぞれの特色を持った唯一無二の地域の文化財を考えていって欲しいから。
22	伝えていかないとそこで記憶が途切れるものも多いから。
23	そうしたものの価値を次世代に伝えるべきと考えるため
24	時代の流れの中で色々なものが失われていくのは悲しい。次世代の学びのためにもつたえていくべき。
25	文化財を守っていききたいから。
26	実際に自分が伝えてもらっていて、それによって自分は岩国の出身なんだ、と自信をもてるから。自分よりも後につづく世代が岩国を誇らしく思えるようにしてあげたい。
27	文化財が地域にあることで、自分の地域を誇りに思ったりすることができてアイデンティティの1つとなるため。
28	海外や県外へ出るとき、地元は何があるか、というのは知っておくかなり役立つと都留にきて感じました。また自分の地元に好きになれると感じます。
29	文化財はその地域の歴史を物語るものであり、同時にその地域のアイデンティティと言っても過言ではないから。
30	地域の歴史や文化を、文化財を通して、知っていけると思うから。
31	次世代に伝えていくことは大切だが、そもそも次世代があまりいないため、継承が難しいのではないかと思ったから。
32	地域のためだけでなく、特に文化財の色濃く残る地域は地元以外でもその土地を魅力に感じた人々のためにも協力して伝えていかないといけないと考えたため。
33	伝統は引き継ぐことが当然のことですし、何より地域の一体感をつくる心の寄りどころのようなものになると思うから。
34	地元から離れてから、地元を代表する文化財などについて、実は知らなくて、語るができないことを感じました。文化財を語ることで地元を語れる人になれたら、と思ったので。
35	地域の人に自分の故郷を誇りに思い、好きでいてもらえると良いと思うから。
36	今、私たちが暮らしている地域は、先人の方々が培ってきたものの賜物だと私は思います。だからこそ、私たちが先人の方々と同様に、未来の人々が地域に誇りをもって暮らすためには、文化財などを伝えることが必要だと感じたからです。
37	無回答
38	コミュニティ形成、あるいはその維持に大きく関わるものだと感じるため。地域アイデンティティの形成に必要で有効だと感じる。
39	古くからの歴史がなければ今はないから、大切にしていけるべき。
40	コミュニティの中心になっていたり、歴史的にも価値のあるものを残す事は大切だと思います。ただ、人手不足や資金の事を考えると、無理に保存活動をする必要はないかもしれないと思っています。
41	無回答
42	文化財が時代とともにもしもなくなってしまったら、日本の文化が希薄になってしまうと思う。
43	過去があるから今の文化があり、さらに未来につながると考えるから。そこで、地域による多様性のある文化がなくなってしまうとこれから造られる文化に多様性がなくなってしまうおそれがあると考えから。
44	地域のアイデンティティにつながるから。地元愛!
45	今まで受け継がれてきたため。文化財から学ぶべきことがあると思うため。

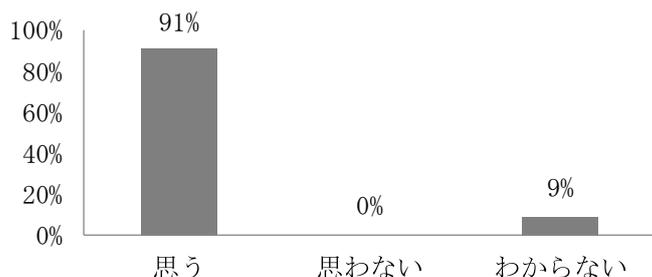


図3 文化財を地域の大切なものとして次世代につたえていくことは重要だと思うか(問6)

問6、7は、文化財を地域の大切なものとして次世代に伝えていくことは重要だと思うかという設問で自身が出身地以外に居住した場合、その地域の文化財保護について、どのような考えをもつのかを明らかにするために設定した。回答は図3と表5にまとめた。問6（図3）で「思う」を選択した回答者は45名中41名で全体の91%を占める。「思わない」は0名で、「わからない」を選択した回答者は、No.31、37、38、41の4名で全体の9%を占める。この設問に関しては、回答者のほとんどが地域で文化財を保護する必要性や必然性を抱いていることがわかる。なお、問6で「思う」を選択した41名の回答者の内、選択の理由として最も多かった回答は、文化財が地域のアイデンティティや土地柄、「らしさ」のような地域の固有性を生み出すものであるというもので、No.2、3、6、27、29、38の6名（15%）が回答した。次いで多い回答は地域の誇りとなるというもので、No.20、21、27、35、36の5名（12%）が回答し、No.7、11、33、45の4名（10%）が、文化財が今まで受け継がれてきたものであるから、No.8、18、33の3名（7%）が文化財はよりどころであるからというように、回答理由が重複して確認できた。問8は文化財を保護して、未来へ継承していくことに対する自由記述であり、31名から回答を得た。なお、この回答は問5、7の自由回答と重複するものが多いため、本稿では全ては掲載せず、必要に応じて示すことにする。以下では、調査結果から大学生の文化財に対する意識の傾向を考察する。

4. 考察

(1) 出身地の文化財に対する認識

問3（表3）の回答でNo.10、12は同じ甲府市出身であるが、自慢したり大切に想う文化財としてNo.10は信玄公まつり、No.12は月輪延命地藏尊と楠木地藏を回答し、同じ出身地でも文化財に対する認識には個人差がみられる。一方で、No.14、15の静岡市出身者の回答は、登呂遺跡、久能山東照宮が共通するが、これは、登呂遺跡は特別史跡に久能山東照宮は本殿が国宝指定されており、出身地における文化財の知名度が高いことが関係していることが考えられる。なお、市民の文化財の価値に対する意識に絶対価値という発想が関与していることを考察したが、回答者のうち国宝・重要文化財および国指定・選定の文化財を挙げているのは、No.3、4、5、7、8、11、14、15、17、20、21、22、25、26、27、28、29、34、35、36、38、39、43、44、45の25名の回答で全体の56%と半数程度であることや例えば、No.44は国重要無形民俗文化財の長浜曳山祭とともに長浜市指定文化財の長浜城を回答するなど、必ずしも文化財指定の価値序列や文化財の絶対価値が自慢できたり、大切に思ったりする文化財の認識に直結しているわけではないことが推察される。

(2) 出身地の文化財の保護や継承に関与する意識

問2（図1）において出身地で大切に思ったり、自慢したりできる文化財の有無で87%の回答者が「ある」を選択したのに対し、問4（図2）では、出身地の文化財の保護や継承に何らかの形で関与する想いの有無について「ある」と回答したのは56%の回答者で31%減少している。問4の設問で「わからない」という選択に転じた回答者の内、No.8、11、27、33、34、45の6名（40%）が、出身地に帰るかわからない、あるいは帰らないことを「わからない」の回答理由としている。こうした回答から出身地の文化財保護に関与するためには、地元へ帰るという選択肢で実現されるという発想が回答者に内在することがわかる。また、問5（表4）でNo.34の「帰ったとして、どうしたらよいか」がわか

らない。」という回答やNo.11の「どのように関わられるのかわからないから。」という回答にみられるように、出身地の文化財保護に対する関与の方途を具体的にイメージできないことも「わからない」という回答に影響していることもわかる。一方で問5（表4）においてNo.4、18の「ボランティア」に参加するという回答のように、出身地の文化財保護に関与する方途を具体的にイメージする回答者も確認できることから、文化財保護に関与する具体的な方途のイメージを抱くことができることは、若者の出身地の文化財の保護や継承に対する関与の有無に少なからず影響を与えることが考察できる。

（3）地域の文化財保護に対する認識

問6（図3）では、文化財を地域の大切なものとして次世代に伝えることに対する重要性について、「思う」を選択した回答者は91%と大部分を占め、問4（図2）の出身地の文化財の保護や継承への関与の設問で「わからない」と回答した15名の内、No.31がこの設問で再度「わからない」と回答したのみで、この問6の設問では一転して「思う」を選択している。この回答は、出身地以外の地域へ居住した場合でも、地域の文化財保護に興味・関心を示す回答者が多い可能性を示すといえる。また、「思う」を選択した回答者の選択の理由から（問7）、文化財が地域のアイデンティティや誇りを喚起し、よりどころであるという認識から、文化財に対して抱く心性が保護の想いを喚起する動機づけとして作用している可能性が考察される。これは若者が出身地の文化財に対して、絶対価値とは異なる価値観を抱いている可能性も同時に推察できる。

5. おわりに

本稿では、現在の文化財保護政策において保護の担い手として期待される若者が文化財保護に対してどのような想いを抱いているのか明らかにすることを目的にアンケート調査を実施した。その結果、出身地で大切に思ったり、自慢したりできる文化財があるという回答は87%であるが（問2）、自身がその文化財の保護に関与したいと思うかという問いに対し、関与したいと思うという回答は56%に減少した（問4）。減少の要因として、自身の将来の進路先に出身地を選択するか否かが「わからない」という回答に結びついたことと、若者が出身地の文化財保護に対する関与の方途を具体的にイメージできないことも「わからない」という回答に影響した可能性を検討した。ただ、出身地によらず、文化財を地域の大切なものとして次世代に伝えることに対する重要性については、91%の回答者が「思う」を選択した（問6）。この回答は、出身地以外の地域へ居住した場合でも、地域の文化財保護に興味・関心を示す回答者が多い可能性を示すといえる。また、この回答理由から、文化財が地域のアイデンティティや誇りを喚起し、よりどころであるという認識が若者に内在し、絶対価値とは異なる価値観で文化財を認識している側面を明らかにした。

問4で「わからない」を選択した回答者を鑑みると、文化財保護の担い手を考えるうえで、若者が出身地の文化財保護にいかに関与できるのか、また出身地以外に進路先を決めても、出身地の文化財に関与できる施策や仕組みを具体的に構築することが、現在の文化財保護施策に求められると筆者は考える。また、問5の自由回答でNo.43が「今まで文化財の保護等と自分の将来を結び付けて考えたことがなかったが、今回この講義を受けて興味が湧いた。具体的には何も考えていないが、調べてから何かしらの形で関わることも考えたい。」と講義の内容に言及した回答や問8の自由回答でNo.41が「私自身、文化財を身近に感じる経験があまりなかったので、正直文化財を保護する必要性はそこま

で感じないです。授業を受けるまでは多くのお金と時間をつかってまで文化財を保護するくらいならほかにすべきことがあるのではないかと感じてしまっていました。文化財が心のよりどころになるような経験が少しでもあれば、文化財に対する考え方も変わっていたのではないかなと思います。」という回答が確認できるが、これらの回答は、高等教育に限らず、文化財保護に関する教育が若者の文化財保護への理解や関心に少なからず影響すると筆者は考え、この点も含めた施策や仕組みづくりの検討を研究課題にしたい。なお、本稿のアンケート調査は、サンプル数が少なく、また青年層の回答を得ることができたが、属性は女性に偏りがあることや調査対象者は少なからず文化財や博物館に興味・関心のある受講生であるため、この点はサンプル数を増加させるとともに、回答者の属性を考慮した調査を実施する必要があると考え、今後の研究課題とする。

註

- 1 調査は対象者に以下の質問紙に記された調査趣旨・注意事項を口頭で説明し、同意を得たうえで実施した。

地域の文化財保護の意識に対するアンケート調査	
このアンケートは地域の文化財保護に対してどのような意識をもっているか調査するためのものです。この調査は無記名で、回答は統計的処理を行い、この調査・研究のためだけに利用します。したがってあなたの個人情報に他へ漏れたり、ご迷惑をおかけすることはありません。また、回答は強制しませんので、ご理解いただける方はこの調査・研究にご協力をお願いします。 作成者：森屋雅幸	
問1. あなたの性別、年齢、出身地を教えてください。	
性別（①男性 ②女性） 年齢（ ）歳 出身地（ ）都・道・府・県、（ ）市・町・村	
問2. このアンケートでいう文化財とは下に記したのですが、問1で答えた出身地で大切に思ったり自慢できる文化財はありますか。あてはまるもの（①～③いずれか）に○印をつけてください。	
・歴史ある神社や仏閣 ・地域の祭りや伝統芸能 ・古い樹木や自然に生息する生物 ・貝塚や集落跡 ・古墳や城館などの遺跡 ・仏像や絵画、工芸品 ・古文書や古地図 ・古い写真や書籍 ・明治から昭和の初め頃までの建造物 ・戦争にかかわる遺跡・資料 ・戦後から高度成長期の歴史を伝える資料 ・古い生活道具や農具、漁労具など生業にかかわる道具	
①ある（問5へ） ②ない（問6へ） ③わからない（問6へ）	
問3. 問2で「ある」と答えた方、具体的な文化財の名称を教えてください。未指定の文化財でも構いません。分からない場合は通称などでも構いませんし、いくつ挙げていただいても結構です。	
（ ）	
問4. 問2で「ある」と答えた方、将来、問3で回答した文化財の保護や継承に何らかの形で関わりたいと思いますか。あてはまるものに○印をつけてください。	
①思う ②思わない ③わからない	
問5. 問2で「ある」と答えた方、問4でそのように答えた理由はなぜですか。理由を教えてください。	<input type="text"/>
問6. あなたは文化財を地域の大切なものとして次世代につたえていくことは重要だと思いますか。	
①思う ②思わない ③わからない	
問7. 問6でそのように答えた理由はなぜですか。理由を教えてください。	<input type="text"/>
問8. 文化財を保護して、未来へ継承していくことについて思っていることをご自由にお書きください。	<input type="text"/>
ご協力ありがとうございました。	

- 2 大学改革支援・学位授与機構「大学基本情報2019」<https://portal.niad.ac.jp/prtr/table.html>（2020年9月26日閲覧）。

参考文献

加藤有次『博物館学序論』雄山閣、1977年。

馬場憲一「地域主権実現のための自治体文化財政策について—新たな『文化財』概念の構築を踏まえて—」『現代福祉研究』13、法政大学、2013年、1-22頁。

福岡猛志「地域にとって文化財とは？」『知多半島の歴史と現在』21、日本福祉大学、2017年、91-98頁。

文化審議会『文化財の確実な継承に向けたこれからの時代にふさわしい保存と活用の在り方について』2017年。

文化庁『文化財保護法に基づく文化財保存活用大綱・文化財保存活用地域計画・保存活用計画の策定等に関する指針』2019年。

森屋雅幸「子ども・若者の文化財保護の実態について —『文化財愛護少年団活動』を中心に—」『昭和女子大学現代教育研究所紀要』5、昭和女子大学、2019年a、59-68頁。

森屋雅幸「文化財と地域住民の健康・福祉の関わりについて—山梨県指定文化財旧尾県学校校舎を事例に—」『社会デザイン学会学会誌』10、社会デザイン学会、2019年b、67-77頁。

